特集 2

2003 年度文学部共同研究

「生涯学習社会における知識創造型学校・大学・図書館の活動形態に関する研究」

今年度、私たち 4 名は関西大学文学部共同研究として表記のテーマで研究を行った。今年度の研究組織は次の通りである。

研究代表者：文学部教授：赤尾勝己　文学部教授　：藤井　稔
文学部教授：倉橋英逸　文学部助教授：山住勝広

本研究テーマに基づき、以下に各研究者からの論稿 4 点を掲載する。1 番目は、赤尾勝己による「公民館における消費者問題講座プログラムの形成過程――市民企画委員会議への参与観察を通して――」である。ここでは、大阪府 T 市立中央公民館で 2003 年度に公募された市民企画委員が、職員とともに消費者問題講座のプログラムを創っていく過程が参与観察によって記録されている。そして、学習組織としての市民企画委員会議において、どのような学習が生起して講座プログラムが形成されていったかを分析しようと試みている。残念ながら、このケースでは知識創造は十分生起しなかったが、企画委員会議を学習組織たらしめるための課題についてまとめることができた。

2 番目は、藤井　稔による「ストレス・コーピングの生涯教育・生涯学習」である。ここでは、ストレスフルな社会に生きる私たちにとって、自殺者 3 万人の時代に入った成人期の過労死対策のための精神保健がもっとも緊要な課題であると指摘されている。そして、ストレスは、乳幼児期における虐待、少年期のいじめ、青年期の受験、老年期の介護というように生涯にわたるものであり、こうした問題に対処するために、ストレス・コーピングのための教育と学習が、生涯においてなされる必要が説かれている。

3 番目は、倉橋英逸による「生涯学習のための情報リテラシーと遠隔学習――米国の高等教育における取り組みと認定基準――」である。ここでは、情報リテラシーの教育が、アメリカの図書館情報学の根幹に位置しており、それが批判的思考の育成に寄与していることがわかる。そして、ここでは高等教育の遠隔学習において情報リテラシー教育がどう進められるべきかに関する認定基準が示されている。

4 番目は、山住勝広による「社会と連携する大学の中の学校――ニュースクール・プロジェクトの活動理論的研究――」である。これは関西大学の中に設けられたニュースクール・プロジェクトにおいて、活動理論を下敷きにして、地域の小学生を対象に教育活動をデザインし、実践していく様子が描かれている。ここでは、大学と地域をリンクさせることで、学び、交流、教育と、理論研究、実践研究、社会貢献を融合したハイブリッドな活動システムの創造がめざされていることがわかる。

いずれの論稿も生涯にわたる学習と密接に関連しており、赤尾論文が成人期を、倉橋論文が青年期を、山住論文が少年期を主たる対象として、藤井論文がすべての発達段階をカバーしている今回の共同研究は、各人の研究の守備範囲と問題意識を尊重して行われたが、今後は、さらに「知識創造」というキーワードを基にした研究を各人が深めていく必要性があると思われる。　（赤尾勝己）